

第 1 回 地域振興官民協働委員会議事概要

日 時	平成 24 年 8 月 28 日（火） 13：30～16：30
会 場	佐渡市中央図書館
出席者	松田祐樹、小林かおり、渡邊啓嗣、鈴木涼太郎 大橋幸喜、計良孝晴、藤原淳、斉藤昌彦、中村長生
議 題	①地域にある資源を活かした地域づくりについて ②方向性の共有と地域経済への結び付け、リーダー支援について ③高齢化している地域コミュニティをどのように維持するか
議事概要	<p>■地域対策として10月を目途にして、平成25年度の制度として予算化をしたい。短期間になるが集中的に集まり、議論したい。</p> <p>①地域にある資源を活かした地域づくりについて</p> <p>■新しい公共の取組（小林）と民泊などの教育実習（渡邊）の取組とを連携させると、地域の勉強と体験が一緒にできて、効果があるのではないか。</p> <p>■民泊のアンケートを集計すると100%「楽しかった」と満足度も高く佐渡観光に対するイメージと真逆の結果となっているので、佐渡は魅力が十分にある。観光ではなく、地域に目を向けた対策がいる。</p> <p>■民泊は地域のリーダーにもものすごく負担が行っている。何らかのリターン、リーダーが満足度を得られるような対価、モチベーションを維持していくだけの対価が必要。</p> <p>■佐渡ライフスタイルの確立。山、海などの単独の要素だけでは他の地域に負ける。沖縄やハワイのように、佐渡スタイルとして、山、海、畑、田などのライフスタイルをまとめて佐渡のイメージを作り上げたい。全島を網羅する必要があると思う。</p> <p>■例えば大学生を地域に入れると、自分たちの地域を見直すきっかけとなり、「誇り」を取り戻すことができることが分かってきた。祭などを簡略化、期間を短くすることで意識も離れて衰退してしまい、結果として過疎化や組織の弱体化に向かってしまう。</p> <p>■製造免許などの問題もある。</p> <p>■地域の資源に対するギャップを埋める、意識を変えていくにはどうしたらいいか。</p> <p>■各地で取組んでいる活動の支援をどのようにするか。</p> <p>■取組のネットワーク化をどうするか。</p> <p>■観光はメインではなく、ある意味観光は何でも取り付くことができるので、地域が主体となった取組を行うことが必要。</p> <p>■佐渡も外側が厳しい。外海府や小木、前浜などの地域が元気にな</p>

らないと佐渡全体は元気にならない。地域の想いの低下が、人口の流出を招いている。

■複数の地域を取りまとめる中間組織が必要。集落の集合体として地域の活動を受ける受け皿を作る必要がある。(例えば道普請をビジネス化できないか。若手が副業として取り組めないか。)

■拠点を使った支援（新潟大学の農学部など）

■集落が人を雇うということができれば、地域活動が維持できるのではないか。

②方向性の共有と地域経済への結び付け、リーダー支援について

■リーダーへの支援の形は補助だけではなく、サブリーダーやサポーターを付けた事務補助がほしいし、それがあると取組がもっとできる。

■資源があっても事務局をどうするかが問題になってくる。

■お土産についても、佐渡のものは量が多い。地域で購入して、お土産にしやすい大きさに切り分け、パッケージ化して売り込むことも必要。

■イカなど五枚もいらぬ。小分けにしてかわいいデザインパッケージでお土産にした方がいい。地域で出来ることがあると思う。

■幅広くビジネスモデルを募集して支援してはどうか。また支援していく必要があるのではないか。

■地域を絡めたビジネスモデル、チャンスは視点を変えればいろいろあると思う。

■アソートしてパッケージ化してもいい。おしゃれなもので。

■ワカメと団子、海苔がパッケージであってもいい。

■「海府やぼらバーガー」（サメ、シイラのフライバーガー）の仕掛けとして、未利用の材料を活用するだけでなく、地元産材などのストーリーを組み込むことが必要。バーガーだけでは成り立たないので、他のものも必要。グリーンツーリズムなどともコラボレーションしないとイケない。人材がボランティアで行っており、イベントなどでないと対応できない。常駐は無理。

■有償のボランティア制度を確立する必要がある。市が明確に位置付けて推進してはどうか。

③高齢化している地域コミュニティをどのように維持するか

■高齢化してリーダーがいなくてどうするかも考えないといけないが、キーマンがいなくて地域に活性化のために入っていくことはできない。

■外部から連れてくる方法があるが、まずは地域で出来るかできな

	<p>いかを考える必要がある。外の力を借りるのはその次。</p> <ul style="list-style-type: none"> ■コミュニティリーダーを募集してはどうか。 ■海士町は、総合計画で、「1人でできること、10人でできること、100人でできること」といったように自助、共助、公助をわかりやすく説明する別冊をつくっている。 ■地域には特色があり、一つ一つ顔が違う。 ■近隣の地域を持ち上げることで衰退している近隣の地域をフォローできる。まずは元気で資源があり、リーダーもいる地域をテコ入れしていくことが今は求められる。 <ul style="list-style-type: none"> ■官民協働委員会の相互連携がいるのではないか。 ■3年計画くらいで、5年後、10年後にしっかり残る制度にしたいのので、次回はもっと踏み込んで議論しないとイケない。 ■次回は、9/19 13:30 中央図書館 ■松田委員長、渡邊副委員長
<p>次回検討事項</p>	<ul style="list-style-type: none"> ■地域の資源を活かした取組をボランティアで終わらせることなく、有償のボランティアとした制度を確立して取組を拡大していくためにどうしたらいいか。 ■地域の誇りや宝物が当たり前になっており、良さに気が付いていない。発想や視点を変えるためには何が必要で何ができるか。 ■各地で実施している取組の情報を集約し、発信、協力、ネットワークするためにどのようなことが必要か。 ■事務局やリーダーをサポートするためにはどのような仕組みが必要なのか。(サブリーダーの育成、サポーターの育成、金銭支援 等) ■複数の地域を取りまとめる中間組織が必要。集落の集合体として地域の活動を受ける受け皿としてどのような体制を構築するか。(例えば道普請をビジネス化できないか。若手が副業として取り組めないか。) ■若者が定住するための、コミュニティビジネスなどの起業支援をどのように行うか。